

## ファシズム・革命・逃走線

### —革命的になることの隘路で—

都丸雅樹

#### 序 出来事が我々に襲い掛かるとき

2021年1月6日、およそ政治に関心をもつものなら無視できないであろう出来事が生じた。前年の選挙で敗北したドナルド・トランプの支持者たちが、選挙不正があったことを訴えて合衆国議会議事堂を襲撃したのである。この事実上のクーデター未遂が大きな衝撃であるのは、ただ単にそれが先進国で生じた、それも政治/経済的に大きなヘゲモニーを握るアメリカで生じた、という理由だけによるのではない(またそれが、非常に馬鹿げた嘘に導かれたものであったからというのでもない)。この出来事が衝撃的であるのは、それがいままで変革を求める側が依拠していたような力能を奪い、捻じ曲げ、左翼的な政治哲学の根幹を脅かすようなものだったからである。これまで左翼が依拠しようとしてきたようなネットワーク的な横断性、潜在的なものの力能の称揚、多元主義等々は、最悪な形でファシズムと合流しているように思われる。そしてより悪いのは、変革を目指す左翼の側がこうした事態にほとんど対抗できていないようにみえることだ。議会襲撃事件やそれに続くドイツのクーデター未遂に対処しているのは既存の国家であり、左翼ではない。ここでの危機は重層的である。もし左翼がこのような運動の抑圧を求めるならば、それは国家を通しての監視管理体制の強化を主張することになりかねない<sup>2</sup>。他方で左翼がいまのままであるのなら、それは(歴史上繰り返されてきたように?)ファシズムに敗北することを意味するだろう。なぜならファシズムの流れに抗して運動=闘争を展開することが、できていないからである<sup>3</sup>。

本論文の目的は、上述のようなファシズムの興隆を分析するとともに、現状における新しい政治的な闘争の可能性を、主にドゥルーズ&ガタリの『千のプラトー』とカウンター・カルチャーを分析することで探ることにある。こうした試みを進めていくにあたって、まず第1章では理論的な前提を考察するために、68年以後の政治的状況を階級意識とその多様化を軸として考察する。1968年の国際的な闘争を機として、左派の政治闘争は「階級意識」を脱中心化(脱プロレタリア化)し複数の闘争(そのも

っとも典型的なものはアイデンティティ・ポリティクスであるが)を志向するものになったが、それが現在の状況とどのような関連をもっているのかを、桂秀実、マーク・フィッシャー、G.ルカーチの議論をもとに探っていく。続く第2章では、この多様性・多元性を下支えし、肯定するようなものとして、G.ドゥルーズのニーチェ解釈を検討するとともに、これらの議論がなぜ今有効なものとならず、反動的に活用されているかの繋がりを探る。後の3章ではこうした問題設定を受けてドゥルーズ=ガタリの『千のプラトー』からどのような闘争戦略が引き出せるのかを、カウンター・カルチャーという具体的な対象との接続の中で考える。

付言しておけば、本論文では哲学的な解釈の積み重ねをしたいのではない。先程から繰り返している言葉を使うならば、ここでは実践と実際に起きている運動の分析が中心となる。「哲学者たちは世界をたださまざまに解釈してきただけである。肝腎なのはそれを変えることである」<sup>4</sup>。このテーゼは、本論文において常に繰り返し意識されるだろう。

#### 第1章 階級意識は騙されたのか?

分析を始めるにあたって、マーク・フィッシャーが彼の最終講義において述べたことを参照しよう。彼は第3講義でルカーチの「階級意識」概念を検討した後、第4講義においてトランプ現象について分析する。その際彼はまず、最終的に新自由主義の台頭(=サッチャー政権)へと至ることになる70年代のイギリスを例にあげ(そしてこれは、桂が闘争の国際的多様化の時代として指摘している時期とも重なる)、そこでは階級といったものが排除されていたと述べ、しかしブレグジットやトランプ現象の中である種の階級の力学が回帰しているという。ここで注目したいのは、そこで言われている階級が「階級意識なき階級」<sup>5</sup>と呼ばれていることだ。この言葉を理解するために、簡潔にはあるがルカーチの「階級意識」に関する議論を参照しておこう。

ルカーチは、我々がそれ自体として世界を認識する際に現れている意識、つまりは日常的で即自的な意識を「ブルジョワ的観察方法」に基づくものとして批判する。それは世界の全体的な関係性から切り離された(マルクス主義の伝統的な言葉で言えば物象化された)意識=観察方法にすぎず、それはイデオロギー的に歪められた形での意識でしかない、というわけだ<sup>6</sup>。では、彼のいう「階級意識」とは一

体何であるのだろうか。以下、ルカーチによる階級意識の定義をみておこう。

[...] 生産過程のなかの一定の類型的状態に帰せられ、それに合理的に適合する反応が、階級意識なのである。したがって、階級意識は、階級を構成する個々のひとが考えたり感じたりなどするものの合計でもなければ、その平均でもない。しかも、結局、階級全体の歴史的に意味のある行為は階級意識から規定されるのであって、個々人の思惟によって規定されたりするものではない。それはただ階級意識だけから認識できるものなのである<sup>7</sup>。

つまりルカーチにおける階級意識とは、即自的な直接性のうちにある意識でもなければ、階級に属する個々人の意識の総和でもなく、それらに抗して、社会の全体性＝システムの中で自らの位置を把握し、実践的に立ち上げられるべき意識である。このような意識を獲得することによってのみ、階級は自らの利害を正確に認識し、歴史的に有効な行動をとることができるルカーチは述べる。では、このような「階級意識なき階級」とは一体何であるのだろうか？そしてトランプはどのようにこれを活用したのだろうか？

トランプは富豪であり、階級の代弁者には到底思えない。そのような彼が階級を動員できたことの理由として、フィッシャーは端的に「階級」が幻想によって騙されているということ、そしてそれによって階級意識の立ち上げという実践から切り離されているということを理由として挙げる<sup>8</sup>。続けて彼はこのような幻想が成功した理由をより詳細に説明するために、階級の不在からくる様々なアイデンティティ・ポリティクスへの集団の分断を語り、それが結果として彼が「アイデンティタリアンのルサンチマン」<sup>9</sup>と呼ぶものを助長し、右派がそれを活用したと述べる。もちろん彼は階級の脱中心化によってさまざまな方面での闘争（フェミニズム、LGBTQ+、BLM等々）が盛んになったことを決して否定しているわけではない。しかしそれが、結果として固有のアイデンティティを共有する集団の問題に還元され、集団間の横断的連帯を実現することができていないというのは、正当な現状分析であるように思われる<sup>10</sup>。だが少なくともこの段階での議論においてフィッシャーが問うていないことがひとつある。それはなぜ、真の階級意識の立ち上げより

も、人びとが幻想の方を選んだのかということである。階級が脱中心化され、幻想に騙されたからではないのか、ということは循環論法でしかない。それでは階級意識の立ち上げは常に騙される危険がある（階級の普遍的真理は存在しない）ということ暗に認めることになるし、階級意識の立ち上げの側が勝利するのはいかなるときかということも明らかにできないからだ。これはなぜ人々は利害に反してまで自発的に服従し、ファシズムを勝利に導いたのかと問う、ドゥルーズ＝ガタリの問題系<sup>11</sup>に繋がる問いである。

さらに言うならば、ルカーチに反して現代のファシズムは、奇妙なほど階級意識の立ち上げという実践の図式と類似したものを活用しているともいえる。例えばトランプ支持者や陰謀論者たちは、ルカーチが言うような即自的な意識のレヴェルに単にとどまっているのではない。不正選挙の訴えにしる、ワクチンの陰謀論にしる、彼らは現状を批判し、かつ集団的な意識の立ち上げに参加しているようにみえる<sup>12</sup>。すなわち（どれを偽物でどれを本物というにせよ）複数の全体性のようなものがあるかのようにみえるのだ。これは階級の脱中心化の裏面でもあり、ポスト・モダン（68年以後）的な政治状況の暗黒面ともいえる。

問題は重層的だ。階級意識、ないしは階級闘争が極限まで弱体化したとしても、資本主義化における搾取／被搾取の現実の関係としての「階級」が消え去るわけではない。闘争の多元化はそれ自体として様々な問題提起、様々な横断的連帯を可能にするものかには見えたが、実際のところそれは階級闘争のもっていた固有の利害関係の側面を弱め、結果として彼／彼女らの要求はシステムの内的な（アイデンティティ的）承認の問題に還元されているように思われる。だからといって我々は、一元的な階級意識へ帰帰することもできない。ファシズムはこうした隘路から力を得ているように思われる。

我々は続く第二章において、ニーチェに基づきながら多元性の中での評価の問題を導入したG.ドゥルーズの哲学を批判的に分析し、現代のファシズム的運動をより詳細に見ていこうと思う。そしてドゥルーズ＝ニーチェ的なヴィジョンが我々にもたらすさらなる隘路を検討しよう。

## 第2章 歴史は繰り返す—ファシズムに侵される

### ニーチェ

我々が前章において検討してきた問題を、ドゥルーズはニーチェを分析する中で次のように明確に述べている。

批判の問題とは、さまざまな価値の価値であり、さまざまな価値の価値が導き出されてくるものとしての評価、つまりはさまざまな価値の創造の問題である。評価は、それに対応するさまざまな価値の差異的要素として、すなわち同時に批判的で創造的な要素として定義される。それらの要素に関わる諸評価は、さまざまな価値ではなく、判断し評価する者たちの存在の仕方、実存の様式であり、これらの仕方や様式は、彼らが判断を下すところのさまざまな価値に対して原理として機能する。それ故に私たちは、自分たちの存在の仕方や生の様式に相応しい信念、感情、思想を常に持つのである<sup>13</sup>（論文執筆者訳）。

以上のテキストは、価値と評価という単語が繰り返されるため一見複雑に見えるが、その論旨は明快である。まずドゥルーズ＝ニーチェはある対象にさまざまな価値 (valeurs) があることを認める（その意味でドゥルーズ＝ニーチェの理論は本質的な多元論 (pluralisme essentiel) のもとでしか理解されないといわれる)<sup>14</sup>。重要なことはそれら複数存在する価値の価値であり、それらを導き出し創造するものとしての諸評価 (évaluations) である。価値の価値（どの価値に価値を見いだすのか）という評価の問題は、原理的に判断を下す者の存在の仕方、生の様式によって決定づけられると言われる。

ドゥルーズ＝ニーチェはここで政治哲学をその根底から揺るがすような、そしてそれらの問題を新しい次元へと移すようなことを言っている。すなわち政治的な意識の問題は、さまざまな価値の問題ではない。重要なことは、それら価値の選択 (= 評価) の問題であり、それらを決定する生の様式とは何であるか、なのだ。マルクスはそれをある意味では認識していたように思われる。本稿の序文で挙げたテキスト (文末注4) のなかでマルクスは世界には多様な解釈が存在することを認めている<sup>15</sup>。しかしその後マルクス主義は、唯物史観という歴史的な発展法則の必然性を導入することで、これらの多様な解釈の選択の問題をある意味で放棄してしまう。すなわちプロレタリアの全体性を導入することによ

り、評価の問題を、イデオロギー的虚偽と、勝利すべき歴史的・一元的な真理 (プロレタリアの階級意識) へと置き換えてしまう。だが経済的下部構造の認識がどれだけプロレタリアの利害を代表する現実的を反映した理論だったとしても、それだけではそれは世界を変革する力 (= 実践) にはならない。なぜならプロレタリアの判断が、それに価値を見いだすかは決定されていないからだ。ポスト・トゥルーズが勝利するという問題もこの次元で考えられる必要があるだろう<sup>16</sup>。

問題はこのような多元性の根源である。ニーチェをファシズム的、或いは弁証法的な解釈から切り離しその試みを革命的なものとして提示するために、ドゥルーズは彼の差異の哲学の基礎となるような存在論を、ニーチェのテキストから引き出そうとする<sup>17</sup>。その際キーワードとなるのは「力能意志 (la volonté de puissance)」と「永劫回帰 (l'éternel retour)」である。手短かにこの両概念を見ていこう。

まず「力能意志」であるが、ドゥルーズは「権力への意志」と訳されることもあるこの語を、力を求めるような志向的な意志として考えることを拒む。そのように力能意志を理解することは、すでに定立された現勢的な力を求める意志へとこの概念を還元してしまうことになるからだ。ドゥルーズ＝ニーチェにとって「力能意志」とはより根源的なものである。ドゥルーズはいう。「同時に差異的で発生的でもあるような、力の系譜学的要素、これこそが力能意志である。力能意志とは、関係しあうさまざまな力の量の差と、この関係の中でそれぞれの力に帰着する質とが、そこから同時に生まれてくるような要素である」(論文執筆者訳)<sup>18</sup>。我々の先の問題に引き寄せて言うならば、ある対象に対してある価値を生み出すものが力であり、力はそれぞれに量 (力の強さ) と、その量に基づく質 (他の力との関係の中で、支配する力=能動なのか、支配され、ただそれに反応するだけであるような従属的な力=反動なのか) を有する<sup>19</sup>。力能意志とはこれらを同時に生み出す要素、つまり後にドゥルーズが使用する「強度 (intensité)」と力能意志の概念を結びつけながら鹿野祐嗣が言うように「あらゆる経験的な領野を貫くポテンシャル・エネルギーであり、具体的な事物や現象、状況へと固体化することによって経験的なものを直に創造する超越論的な原理、つまり可塑的にしてアナーキーな発生の原理」<sup>20</sup>である。このような混沌=強度=力能意志から、さまざまな経験的

で具体的なものが生じてくるとドゥルーズ＝ニーチェは考える<sup>21</sup>。

では永劫回帰とは何であるのか。ドゥルーズは力能意志と同じくこの概念も、通常考えられているとは異なり「同じものの回帰」とは考えない。すなわち永劫回帰とはいまこの瞬間が再び繰り返されるといったような循環なのではない。「回帰は生成するものの存在である。回帰は生成そのものの存在であり、生成のうちで自らを肯定するような存在である。生成の法則としての、正しさとしての、存在としての永劫回帰」（論文執筆者訳）<sup>22</sup>。このテキストは何を意味するのだろうか。力能意志を原理＝エネルギーとするならば、永劫回帰はその「法則」といわれる。ドゥルーズはこの「法則」の二つの側面を取り出す。まず第一の側面は平衡状態や（最終的にいきつくようなゴールとしての）終期状態の否定である。もし過去の時間が無限であるとするならば、世界はその可能なあらゆる組み合わせの中で平衡状態や終期状態をすでに実現し、そこからはもうなにも生じてこないような0の状態にすでになっているはずである。しかし事態はそうなっていない。それは生成に始まりもなければ（生成が生成したものであるとして始まりをもつならそれは如何にして生成し始めることができたのか理解できない）終わりもないからであり、だからこそ永劫回帰においては同じものの反復ではなく、さまざまな生成の回帰、すなわち差異の反復＝回帰が語られることになるのである<sup>23</sup>。第二の側面は、永劫回帰のもつ倫理的（思想的）で選別的（存在的）な側面である。倫理的であるのは、永劫回帰がわたしたちにある厳密な規則を課すからである。一度だけ、というやり方で私たちが何かを意志するというやり方は永劫回帰においては決定的に拒まれ、我々は常にそれが無限回繰り返されるであろうということを前提にして何かを意志することになる。これによりそれらは能動的なものとならざるを得ない<sup>24</sup>。選別的であるというのは、永劫回帰が肯定的なものだけを回帰させるからである。なぜなら永劫回帰の反復の中で中途半端なものは結局のところ±0に慣らされてしまい、特権的なもの、極限的なものだけが存在のレベルへと上がってくる（肯定＝創造される）ことになるからである<sup>25</sup>。否定的・反動的なものは、これらの創造的なシステムに対して常に二次的に生じてくるものでしかないといわれるのだ。

鹿野祐嗣はこうしたヴィジョンを「永久革命」への呼びかけとして理解しようとしているが、それは

全く正当であるように思われる。鹿野はドゥルーズ＝ニーチェが敵として定めたものを、表象＝再現前化の体制（生成や差異を認めず、同じものの「再認」と、既成のシステムを乱すような要素からの防衛に基づく体制、すなわち生成されたもの＝二次的なもの＝反動として、新たな生成を拒むような国家・宗教・道徳等々）であるとしたうえで<sup>26</sup>、絶えざる差異＝生成の肯定を、絶えざる革命の反復の肯定とみる。潜在的な力能意志と永劫回帰は常に経験的なものを新たに生み出すが、それはすでに生成されたものとして生成への裏切りとなる。そうである以上ドゥルーズ＝ニーチェの思想はあらゆる「既存のもの」のたちにたいして闘いを挑む、永久革命の思想である、というわけだ<sup>27</sup>。また、この革命は鹿野も言うように「差異や肯定、多数多様な力の散乱は快原則の彼岸にあり、人間的な視点で語られる快と不快、善と悪、喜びと苦痛といった価値を超えている。肯定的な差異はたしかにこの上なく喜ばしいのだが、それはディオニュソスの喜びであって、不快や苦しみと同等に、あるいは場合によってはそれ以上に、人間の日常的な快や幸福を吹き飛ばす圧倒的な威力をもって作用する」のであり、いわゆる進歩的な意味での革命ではない。それは瞬間的な破壊＝創造のひらめきであり、その反復の肯定なのだ。

さて、ここで我々は当初の問題、すなわち政治的なレベルの問題、或いは意識の評価の問題に戻ろう。ドゥルーズ＝ニーチェ的な議論において重要なものは、どの全体性が正しいのかといった問題ではもはやなくなっていた。彼らにとっては第一義的なのは差異、生成＝創造であって、すでに生成されたものは仮象にすぎない。だとすれば彼らにとって評価の基準＝位階となるのは、差異のシステムを承認するか否かであり、その差異に対してどれだけ開かれているか<sup>28</sup>といったある種の姿勢である。彼らの類型（能動／反動、主人／奴隷等々）<sup>29</sup>はここにのみかかっているのだといっても過言ではないだろう。

こうした瞬間的な（鹿野が言う意味での）革命＝創造の肯定、多様性の肯定は、68年以後の政治思想全体の、一種の雰囲気を作ってきた。三島由紀夫と東大全共闘の間で行われた討論において、関係づけられていない事物（表象＝再現前化されていない事物）が現れてくる空間＝解放区について語り、そこでは時間的持続が問題にならないと語った芥正彦<sup>30</sup>。メディアによってすべてが表象＝再現前化される中で、それらを破壊し、それらに包摂されない新しい意味の創造を行おうとしたシチュアシオニスト<sup>31</sup>。そして差異＝特異性の発揮される場を、ポス

ト・フォーディズム的で非物質的な共同的労働の中に同定しながら、特異性＝差異と共同性を接続し<sup>32</sup>、切断（新しい世界の創造）は「瞬間＝カイロス」として到来すると語ったA.ネグリ<sup>33</sup>。すべてにおいて一貫するのは差異の瞬間的なひらめきの肯定である。

しかし、ドゥルーズ＝ニーチェ的なレヴェルでいえば、だれがそのような革命を担えるのだろうか。それはもはや「超人」というしかない。そして何より重大なのは、今現在このような破壊を担い、自らの評価ないしは全体性へと人々を引き寄せているのはファシズムの側であるようにみえはしないだろうか。現職の共和党下院議員であり、トランプ支持を表明するジョージ・サントスは数多の嘘を重ねながらアイデンティティを仮面として使い、自らを演出する<sup>34</sup>。どのような嘘でも、それを信じ、動く人がいれば一つの力なのだ。真実や嘘は、ゲームの中で機能する駒にすぎない。しかしこのような次元はある意味で、68年以後革命を語る者たちの口から聞かれたものではなかったか。もちろん各々の思想家たちが哲学的水準において、自らの革命性を証立することはできるだろう。しかし、力を握っているのはファシズムであり、国家・道徳・宗教を現に破壊し、新しい主体性の生産、全体性の生産をしているのは彼らというほかないのではないか。ここにきて、「現在有効な闘争の水準は、再びテキストの水準に戻っているのではないか」<sup>35</sup>などという鹿野の言葉をみると、我々はマルクスの言葉に帰ることの重要性を再考せずにはいられない。

### 第3章 革命を生きる＝体験するとはなにか

前章において、私たちは階級意識以前の、根源的なレヴェルでの革命と、その孕む問題を見てきた。本章では奇妙な批判を参照するところから話を始めたい。鹿野論文と同一書に掲載の論文において、山崎雅広はドゥルーズ批判を展開している。それが奇妙であるというのは、その批判のポイントが、ドゥルーズは永劫回帰を体験することなく（それを自ら生きることなく）教説の次元でのみ語っている<sup>36</sup>、というところに置かれている点だ。永劫回帰は山崎のいうように「ある日付と場所—すなわち、一八八一年八月の某日、ジルス・マリーア—の刻まれた、ニーチェの特に個人的な体験を源泉にもつ」<sup>37</sup>概念であり、思弁的に練り上げられた概念なのではない。ニーチェはむしろその体験に強いられた形で思想を形作ったのであり、それを結果＝教説だけみて語るドゥルーズはその過程と、体験／教説

のギャップを無視しているといえるだろう。そこから山崎がドゥルーズ哲学を批判する仕方は、非常に強力なものだ。「ドゥルーズ的解釈では、「超越論的なものは永続的に運動して、変形している、だって《永劫回帰》がそれを保証してくれているのだもの」という政治的態度を生み出しかねない。結局、そこではなぜか訳知り顔のドゥルーズの顔を「わかっている」者だけが相互に相うなずくだけの、腐臭を放った世界が、そこでは展開される」<sup>38</sup>。ここで山崎が「政治的態度」という言葉を使っているのは全く正当であると言わざるを得ない。そもそも我々がドゥルーズ＝ニーチェを参照したのは、政治的な選択の問題に対して、ルカーチ的な真理と虚偽という書割的な世界では満足できなかったからに他ならない。しかし結局のところドゥルーズ＝ニーチェは、より根源的なレヴェルへ我々を導くようにみえて、最終的には存在論化された永劫回帰（永久革命）という書割を提供する地点に引き返してしまう。そこでは階級意識の立ち上げという力学、評価をとらえる根源的な力を誰がとらえているのかは決して問われず、せいぜいファシストは反動に類型されるだろうと教説のレヴェルで語れるだけだろう。それはしかし、階級意識の真理は歴史的必然的に勝利するだろうということから、どれだけの進歩があるだろうか。

しかし、ニーチェ的な体験のみをあまりに強調しすぎても、それはそれで我々を政治から遠ざけてしまう。我々はここでドゥルーズ＝ガタリの『千のプラトー』とカウンター・カルチャーの接続の中で、別の体験のレヴェル、生きられる革命といったことを考察していきたい。その中で、現状における対抗戦略を示唆することを試みよう。

我々がここで『千のプラトー』を参照するのは気まぐれでも偶然でもない。そこではまさに体験レヴェル、生のレヴェルで革命が語られているように思われるからだ。まず非常に興味深いのは、『千のプラトー』では完全なアナーキー、鹿野が語った意味での永久革命が降りかかってくることはもはや望ましいこととはされていない。彼らは多様な要素の横断的接続を可能にする超越論的平面を「CsO（器官なき身体）」<sup>39</sup>といい、強度の連続体の中から形相と質量、表現と内容の単位を切り分けるシステムを「地層（strate）」と呼ぶ<sup>40</sup>。そのうえで次のテキストをみてみよう。

CsO〔器官なき身体〕をあまりに暴力的な動作で解放し、不用心に地層を吹き飛ばしてしまえば、君は平面をつくりあげるところかブラックホールに落ち、大惨事を迎えて死ぬということになりかねない。最悪なのは、地層化されたまま、組織化され、意味され、隷属したままでいることではなくて、地層を自殺的、もしくは狂気的な崩壊へと向かわせてしまうこと、そうして地層が我々の上により重く、永遠にのしかかってくることだ。それゆえ我々のすべきことは一つの地層に落ち着き、それが我々に与える機会を実験してみること、そこで有利な場所、場合によっては脱領土化の運動や可能性のある逃走線を探すこと、これらを試みながらあちこちで流れの接続を確保し、各線分ごとに強度の連続体を試み、常に新しい大地のひとかげらを手にいれることだ。地層との周知な関係を通して、我々は逃走線を解放したり、接続された流れを通過させたり逃れさせたりし、CsOのために連続的な強度を引き出すことが可能になる<sup>41</sup>。(論文執筆者訳)

ドゥルーズ＝ニーチェであれば表象＝再現前化の体制として拒んだであろう地層の中でこそ、多様な要素の横断的接続は可能になることがここでは語られる。そしてまた、自由な欲望の表現として、もっとも創造的で根源的な概念として彼らが語った「逃走線」<sup>42</sup>も、地層の中で初めて可能になることが語られている。重要なのはこれらの関係、そのバランスといってもよい。

このバランスをより詳細に考えるために、ここでもう一つだけドゥルーズ・ガタリの創り出した概念を参照しておこう。それは「抽象機械 (machine abstraite)」である。彼らが世界を機械として解釈し、その接続と切断、エネルギーとしての欲望の流れなどを語ったことは広く知られているが、「抽象機械」はその中でも特権的に重要な機械だといっている。「抽象機械」とは一言でいえばあらゆる機械に入り込み、ある種の媒介を可能にするような機械のことである。この機械には上述の二つの要素(地層と逃走線)の間で揺れ動くような奇妙な両義性がある。第一としてそれは様々な地層を媒介し、共振させ、超コード化することによって、ある種の公理をつくりだす(これをドゥルーズ＝ニーチェ的に言えば表象＝再現前化の体制といってもよい)<sup>43</sup>。第

二にそれは様々な要素を結合しながら硬質な線分の間を潜り抜け、突然変異的に逃走線を生み出し、公理系に歯向かう戦争機械をつくりだす<sup>44</sup>。

逃走線／器官なき身体、抽象機械、地層。これらはのちに三つの線、つまり逃走線、柔軟な線分、硬質な線分として語られることにもなる三つの区分だが<sup>45</sup>、こうした概念を導入することは第一に、ファシズムに対する新しい見通しを我々に与える。ファシズムは表象＝再現前化の体制として、フィッシャーのというようなアイデンティタリアン的ルサンチマンによって駆動しているのではない。それはドゥルーズのいうように「あらゆる穴、あらゆる隙間に単一の戦争機械が設置され」(論文執筆者訳)<sup>46</sup>たときに存在する。このテキストの持つ意味は深い。つまりファシズムは硬質な線分よりも柔軟な線分に近く、あらゆるところに浸透する独自の抽象機械と戦争機械を有する。しかしそれらは革命的な意味での抽象機械、戦争機械ではない。ファシズムが用意するのは、それらによってしか他と媒介されないようなものとしてある機械であり、孤立した機械である。全体主義国家はドゥルーズ＝ガタリにとってそれらを共振させるものにすぎない。

この観点からすれば、なぜあまりにも革命の側が提示する図式とファシズムが類似しているのか(そして我々が極右といった言葉を避けファシズムという言葉を使い続けてきたのか)を説明できるだろう。トランプは様々なところに浸透したマイクロ・ファシズムと孤立した戦争機械に訴えているのである。それは横断的接続のようなもの、公理の破壊のようなものを体現するが、決して器官なき身体の上で行われるような自由な横断的接続、様々な逃走線の横断的接続としてあるような戦争機械は創り出さない。それは常に、それぞれ単一の戦争機械に還元されるような群集たちを動員したのである<sup>47</sup>。

こうした事態をみれば、佐藤・廣瀬が『千のプラトール』における対抗戦略を「万人によるマイノリティ性への生成変化」<sup>48</sup>として定式化するのにも頷けるだろう。それは公理のレベルで行われるマイノリティの闘争(マイノリティがマジョリティの一部になることを求める闘争)の中で、マイノリティ性というある種の抽象機械が生み出され、器官なき身体の上で万人がそれへと生成変化することである。しかし、これもあまりに書割的すぎるといえはるものだ。特に佐藤と廣瀬が「模倣や変身はそれ自体としては生成変化ではないが、常に既に生成変化の指標をなしている」<sup>49</sup>というとき、ある種の段階



的革命的書割としてこのような体験が考えられてしまう危険性がある。すなわち彼らはやはり教説から出発しているように見えるのだ。しかし「三つの線は絶えず混ざり合っている」<sup>50</sup>とドゥルーズ＝ガタリは言った。このことを軽視するべきではない。何よりも、器官なき身体が、その原基としてのゼロが、ある種の絶対的マイノリティ性が、即座に人々に知覚される、或いは理解されることなどありえない。そうである以上、我々はここでも体験から教説の順序を重視したい。

生成変化が可能になるのは何よりも、器官なきマイノリティ性への万人の変化が可能となるような体験があつてこそ、であると我々は考えたい。ならば、模倣や変身もその体験的な効果を抜きにして語ることはできない。だからこそ我々は最後に、ファシズムに抗するものとしての「素行の変化

(*évolution des mœurs*)」(論文執筆者訳)<sup>51</sup>について語りたいのである。ここでは一つの議論と、一つの運動だけを参照しよう。フィッシャーはカウンター・カルチャー(ロックなどの音楽に代表される)と現実の変革運動の間にポジティブ・フィードバック・ループと呼ばれるような関係が構築された時期(60年代)が存在したことを語り、それをうまく機能させることができるのではないかという可能性について希望を含みながら語っている<sup>52</sup>。しかしカウンター・カルチャーの潜在的な力はそれだけではないように我々には思われる。その際、注目に値するのは70年代イギリスのパンク・ロックだ。パンクが誕生した時代、それは労働者階級それ自体の運動(賃上げ闘争・ストライキ)と、労働者階級のモル的な代表としての労働党の間に、一種の空転が生

じ始めた時期である。そのような時期にパンクは、マイノリティの衣服の模倣、不良性のスタイルの構築(まさに「素行の変化」だ)、自己破壊とうとうによって新しい逃走線の結集軸となるような抽象機械=戦争機械を作り出したようにみえる。それは実際、奇妙なスタイルと体験を構築しようとする実践だった。それ以前のロッカー、モッズ等々はスタイルを作ったが、パンクのそれは自己破壊、アイデンティティよりもアイデンティティの破壊としてのスタイルだった。パンクが多様<sup>53</sup>でありえたのは、それがマイクロな破壊の体験と、マクロな変身を同時に提供したからに他ならない。

そしてそれはその奇妙な自己破壊のスタイルでもって、数々のマイノリティがマイクロ・ファシズムの単一の戦争機械に自閉していくことに対して抗っていたといえないだろうか。パンク・ロックの革命性、反ファシズム性はこのような地点にあるといつても過言ではない。パンク・ロックは結局敗退し、商品になったということは何の批判にもならない。重要なのはこうした運動を再び模索し、マイクロ・ファシズムに抗わなくてはならないのではないかと、いう提起である。この提起はゴダールの短いスローガンによって要約できる。「われわれもまた、ささやかな陣営において、ハリウッド、チネチタ、モスフィルム、パインウッド等の巨大な帝国の真ん中に、第二、第三のヴェトナムをつくりださなければならぬ」<sup>54</sup>。カルチャーがカウンターになるのは、マイクロ・ファシズムに抗して、各々の分野で横断的戦争機械を構成できるときに他ならないだろう。

<sup>1</sup> 桂秀実 は日本におけるニューレフト運動を、1968年を中心として考える中で、それらの運動は最終的にはいわゆる党派の運動を離れ、外部との接続や横断性、多元性を求めるものになったと結論付けている。彼はニューレフトの党派たちが民族問題への取り組みの不十分さを華僑青年闘争委員会(=華青闘、日本在住の華僑によって設立された新左翼系党派)によって糾弾された1970年の7・7集会を大きな切断点とみなし、次のように述べている。

「七・七集会は、日本のニューレフトのなかにマイノリティー運動の視点が公然と導入された濫觴であり、運動の決定的なパラダイム転換を印すものとなった。[...] これ以後、ニューレフトの課題は差別問題、エコロジー問題、フェミニズム等々の多様な「陣地戦」に、決定的にシフトしたのである。

[...] これらは、六八年革命の世界的傾向に連なる必然的な転換であると同時に、日本のニューレフト

が敢行しなければならなかった「去勢」にほかならない。あるいは逆に、六八年革命のアクティヴィストたちが「他者」を見だし、また自らも「他者」となること、すなわち、社会に刻み込まれた多数多様な「<sup>マルチチュード</sup>襲」<sup>55</sup>として自らが生成変化する「偉大な時」が七・七であったと言えよう(桂秀実『増補 革命的な、あまりに革命的な—1968年の革命—史論—』筑摩書房、2018年、pp. 396-7、[...] は引用者による省略記号で以下同様の意味で用いる)。もちろんこのような運動自体が抱える様々な問題や、運動の権力の側による回収など様々な側面はあったものの、現在の世界的な政治運動において上記のような姿勢(アイデンティティ・ポリティクス、緩やかな横断的連帯)が主流となっていることは事実であり、この意味で「68年が今なお持続する世界革命」(同上、p. 12)であり、「それが圧倒的な勝利以外の何ものでもない」(同上、pp. 12-3)

と主張する絛の視点は、それなりの説得力を有するものである。しかし現時点的な問題は、このような運動が別の新たな運動を生み出しつつあるということであり、それは革命運動の側が有していた要素を別の形で活用しているように見える、ということだ。それは絛の言葉に倣うなら「68年世界革命」の危機ともいっていいだろう。

<sup>2</sup> 実際、左翼ではないがリベラリズムの側は既にそうした論調へと流れているように思われる。つまり、FBIをはじめとする情報機関が襲撃の前段階ですでに情報をつかんでいたにもかかわらず、必要な措置をとらなかったというのである。では多数の通信が監視され、その内容で大量の人物が拘束された方がマシだともいうのだろうか？これに関してはCNN <https://edition.cnn.com/2023/06/27/politics/january-6-scenate-democrats-report/index.html> (2023年6月28日閲覧)を参照されたい。

<sup>3</sup> これは左翼の側がファシズムを批判できていないということの意味するのではなくて、ファシズムを生み出している原理を同定し、その原理に対する闘争を効果のある形で展開できていないという意味である。若きマルクスは、宗教は「民衆の阿片である」(マルクス『ユダヤ人問題によせて／ヘーゲル法哲学批判序説』城塚登訳、岩波書店、1974年、p. 72、傍点原文)と喝破し、阿片を真に批判することは阿片を必要とするような現実的状况を変えることだと主張したが、このような意味でファシズムを真に批判できていないといってもいい。これについては後に分析する。

<sup>4</sup> マルクス「フオイエルバッハにかんするテーゼ」『マルクス＝エンゲルス全集 第3巻』大内兵衛・細川嘉六監訳、大月書店、1963年、p. 5、傍点原文。

<sup>5</sup> マーク・フィッシャー『最終講義 ポスト資本主義の欲望』大橋完太郎訳、左右社、2022年、p. 202を参照されたい。

<sup>6</sup> G.ルカーチ『歴史と階級意識』平井俊彦訳、未来社、1962年、pp. 149-65を参照されたい。

<sup>7</sup> 同上、p. 280、傍点原文。

<sup>8</sup> フィッシャー前掲書(5)、p. 203。

<sup>9</sup> 「わたしはこの言葉を、意識や行動に主体によって定義される階級ではなく、「そうであるよう命じられた固有のアイデンティティに基づく性格によって定義される階級」という意味で用いています」(同上、pp. 206-7)。

<sup>10</sup> 補足ではあるが絛もまた、部落問題と部落解放同盟の関係性からアイデンティティ・ポリティクスが結局アイデンティティの破壊と横断的連帯の実現にはつながらず、理論的にも実践的にも閉鎖的なものとなったことを指摘している(絛前掲書(1)、pp. 397-422を参照されたい)。

<sup>11</sup> 「どうして人は「税金を増やせ！パンを減らせ！」などと叫ぶことになるのだろうか。ライヒは言

う、驚くべきことは人々が盗みをするということでもなければ、ストライキをするということでもない。そうではなくむしろ、飢餓に苦しむ人たちが盗みをしないうこと、搾取されている人たちがストライキをしないうことである。なぜ人は何世紀にもわたって搾取、屈辱、隷属に耐え、単に他人のためというだけでなく、自分たち自身のためにもこれらを望むのだろうか？ファシズムを説明するためにライヒは、大衆の無知や幻想を原因として持ち出すことを拒否し、欲望によって、欲望の言葉で説明することを呼びかけているが、彼がこの時ほど偉大な思想家であったことは決してない。彼はこう言っている。違うのだ、大衆は騙されていたのではなく、ある時に、各々の状況において、ファシズムを欲望していたのである。そしてこれが、我々の説明しなければならない群衆的な欲望の倒錯である」(Gilles Deleuze/Felix Guattari (ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ), *L'Anti-Édipe: Capitalisme et Schizophrénie* (アンチ・オイディプス：資本主義と分裂症), Paris, Minuit, 1972/1973, p. 29.) (論文執筆者訳)。

<sup>12</sup> Qアノン(人肉食を行う秘密結社が世界を牛耳っており、トランプはそれらと闘う救世主であるという主張を中心に活動する運動体。議会襲撃事件でも複数のQアノンメンバーが逮捕された。トランプ陣営との繋がりなどの詳細はThe Guardian <https://www.theguardian.com/books/2023/mar/05/trump-the-plan-review-qanon-trump-unhinged-america-will-sommer> (2023年7月3日閲覧)を参照)を中心とする陰謀論は概ね、真実は隠されており、自分たちはそれに対抗して真実を語るという姿勢をとっている。日本版Qアノンともいわれ、反ワクチン・マスク等のデモで勢力を拡大した神真都Q(やまとキュー)は、公式サイトに以下のような文言を掲げている。「我々神真都Qは、全ての愛する子、孫、あなたを守り続ける為に、ずっと前から皆で、悪政悪権悪行の全てと戦い続けています。

目を覚ませ。真実の90%は、隠蔽・偽作され続けている」(以下のリンクからサイトを閲覧できる。<https://sites.google.com/view/yamatoq/> (2023年7月3日閲覧))。このような図式は、即自的認識は誤っており、何らかの全体性に基づく意識の立ち上げを志向する点で「階級意識」と類似している。

<sup>13</sup> Gilles Deleuze (ジル・ドゥルーズ), *Nietzsche et la philosophie* (ニーチェと哲学), Paris, PUF, 1962, p. 2.

<sup>14</sup> *Ibid.*, p. 5.

<sup>15</sup> そしてこのさまざまな解釈とはニーチェ的に言うならば世界に対する一つの判断であり、根源的には哲学者たちのさまざまな「生の様式」である。クロソウスキーはニーチェを引きながら、哲学者たちは彼らに固有の気分、それが生み出す衝動に基づいて語っているのであり、哲学者たちの論理的一貫性・体系性に反して、それは(その語のもつ正確な意味において)「真理」を語る試みではないと断じてい



る（ピエール・クロソウスキー『ニーチェと悪循環』兼子正勝訳、筑摩書房、2004年、pp.25-7参照）。

<sup>16</sup> リー・マッキンタイアは『ポスト・トゥルース』のなかでフェイクニュースなどの問題に触れているが、彼はその結論で、結局のところ科学的・実証的な真理を認める姿勢へと人々を促すことしかできていない（リー・マッキンタイア『ポスト・トゥルース』大橋完太郎監訳、人文書院、2020年、第7章を参照）。つまり彼はマルクス主義と同じ轍にはまり込んでしまっている。彼はフェイクニュースを信じるか信じないかはある選択の問題であり、それをやめるように決意すればよいというが、そこで捨象されているのはニーチェ＝ドゥルーズ的な問題である。

<sup>17</sup> ここでドゥルーズ＝ニーチェの語る「差異」を、我々が日常的に考えるような様々なものの違い、或いは多元性の中での多様な評価の違いと考えてはならないだろう。ドゥルーズ＝ニーチェにとって重要な根源的な差異とは、ドゥルーズの後の主著となる『差異と反復』の言葉を借りれば「幾千もの声をもつ多様なものの全体のためのただひとつの同じ声、すべての水滴のためのただひとつの同じ《大洋》、すべての存在者のための《存在》のただひとつのどよめき」（ジル・ドゥルーズ『差異と反復』財津理訳、河出書房新社、1992年、p.450）のことであり、このような多様なものたちを生み出す根源的で一義的な存在（多の一）をドゥルーズはニーチェから引き出そうと試みているのである。

<sup>18</sup> Deleuze, *op. cit.*, pp. 77-8.

<sup>19</sup> 「さまざまな力は量をもつが、しかしまたその量的な差に応じた質をもつ。能動 (*actif*) と反動 (*réactif*) は力の質である」(Ibid., p.67)。

<sup>20</sup> 鹿野祐嗣「フランスにおけるニーチェ受容史の中のドゥルーズ—哲学史家と哲学者という二つの顔の間で」『ドゥルーズと革命の思想』以文社、2022年、p.32、傍点原文。

<sup>21</sup> もちろん、力能意志がこのように規定されている以上、我々の日常的＝経験的な次元でそれを捉えることは難しい。しかし鹿野がドゥルーズの「超越論的经验論」を要約して言うように、「〈私〉と対象の同一性という通常的经验の形式を打ち砕いてしまう異様な衝撃の経験」（同上、p.32）は確かに存在し、「それが非人称の強度という超越論的な次元を開示するとともに、実は超越論的な強度から新たに経験的な質と量が創造されること条件にもなっていると考える」（同上）ことはできるだろう。

<sup>22</sup> Deleuze, *op. cit.*, pp. 37-8.

<sup>23</sup> Ibid., pp. 73-4.

<sup>24</sup> これは奇妙な逆説としてとらえるべきである。すなわち無限に繰り返され意志されるといふ重みをもたされることによって、その瞬間は「あらゆる可能な瞬間をはらんで強烈に振動し始め」（浅田彰・島

田正彦『天使が通る』新潮社、1988年、p.86）、直線的・円環的な時間の切断点となる。

<sup>25</sup> Ibid., pp. 106-11.

<sup>26</sup> 鹿野前掲論文（21）、pp.26-9を参照。

<sup>27</sup> 同上、p.46。

<sup>28</sup> ドゥルーズが力能意志の表明として「触発される能力」について語っていること（Deleuze, *op. cit.*, pp. 96-9）、浅田彰がニーチェのいう「強者」を免疫不全者＝あらゆるものに開かれた存在として解釈していること（浅田・島田前掲書（25）、1988年、pp.100-5）を参照されたい。

<sup>29</sup> ドゥルーズ＝ニーチェの類型については Deleuze, *op. cit.*, pp. 226-8における表を参照されたい

<sup>30</sup> 『討論 三島由紀夫 VS 東大全共闘《美と共同体と東大闘争》』新潮社、1969年 pp.39-50。なお本書において茶は全共闘 C と表記されている。

<sup>31</sup> 木下誠「秘密言語の共同体—スペクタクルの社会におけるドゥボールの闘争の戦略」『現代思想』vol.28-6、2000年5月、pp.91-3におけるシチュアシオニスム解釈は、このような革命モデルの典型とも言っているだろう。

<sup>32</sup> トニ・ネグリ『芸術とマルチチュード』廣瀬純訳、月曜社、2007年、pp.53-5を参照されたい。

<sup>33</sup> Antonio Negri & Michael Hardt, *Multitude: War and Democracy in the age of empire*, London, Penguin Books, 2004, p.357.

<sup>34</sup> サントスの数々の嘘についてよくまとまったものとして INSIDER [https://www.insider.com/george-santos-is-not-pathological-liar-expert-on-lying-says-2023-6?inline-end-story-related-recommendations=&gl=1\\*1r0704i\\*ga\\*MTUxODEyMTg0OS4xNjg4NzU0NTA5\\*ga\\_E21CV80ZCZ\\*MTY4ODc1NDUwOS4xLjEuMTY4ODc1NDUyMi40Ny4wLjA.](https://www.insider.com/george-santos-is-not-pathological-liar-expert-on-lying-says-2023-6?inline-end-story-related-recommendations=&gl=1*1r0704i*ga*MTUxODEyMTg0OS4xNjg4NzU0NTA5*ga_E21CV80ZCZ*MTY4ODc1NDUwOS4xLjEuMTY4ODc1NDUyMi40Ny4wLjA.) (2023年7月8日閲覧)を参照されたい。

<sup>35</sup> 鹿野前掲論文（21）、p.95。

<sup>36</sup> 山崎雅広「《永劫回帰》の体験と教説」前掲書（21）pp.167-8。

<sup>37</sup> 同上、p.123。

<sup>38</sup> 同上、p.170。

<sup>39</sup> 「CsO」概念についてよくまとまったものとして、佐藤嘉幸・廣瀬純『三つの革命—ドゥルーズ＝ガタリの政治哲学』講談社、二〇一七年、pp.37-42を参照されたい。

<sup>40</sup> Gilles Deleuze/Félix Guattari (ジル・ドゥルーズ/フェリックス・ガタリ), *Mille Plateaux: Capitalisme et Schizophrénie* (千のプラトー：資本主義と分裂症), Paris, Éditions de Minuit, 1980, p.92を参照。

<sup>41</sup> Ibid., pp. 199.

<sup>42</sup> 「逃走線」はあらゆるシステムから漏れ出していくような、自由で創造的な要素を表現するためにドゥルーズ＝ガタリの使う概念である。この概念の根源性を強調したものとして、佐藤・廣瀬前掲書（40）、pp.151-64を参照されたい。

<sup>43</sup> Deleuze/Guattari, *op. cit.*, pp. 272-3.

<sup>44</sup> Ibid., p. 208.

<sup>45</sup> Ibid., p. 242.

---

<sup>46</sup> Ibid., p. 261.

<sup>47</sup> この意味で、国家とマイクロ・ファシズムの繋がりを強調しているように見える佐藤・廣瀬の記述（佐藤・廣瀬前掲書（40）、pp.176-7）には疑問が残る。その場合、硬質な線分が機能するための柔軟なミニチュア版としてマイクロ・ファシズムを定義することになりかねないからだ。マイクロ・ファシズムとはむしろ、閉鎖的な接続の中で自滅していくような逃走線と戦争機械、つまりは腐敗した革命とでもいうべきものではないか。

<sup>48</sup> 佐藤・廣瀬前掲書（40）、p.209。

<sup>49</sup> 同上、p. 199。

<sup>50</sup> Deleuze/Guattari, *op. cit.*, 242.

<sup>51</sup> Ibid., p.264.

<sup>52</sup> フィッシャー前掲書（5）、pp.222-31。

<sup>53</sup> パンクは実際、多様なマイノリティたちによって構成される、一つの器官なき身体、マイノリティ性への生成変化であったようにみえる。そこでは女性、子ども、移民たちが同時に歌っていたのだ。このような音楽シーンの具体的な姿としては、ドン・レッツ監督「The Punk Rock Movie」イギリス、1978年を参照されたい。

<sup>54</sup> 『ゴダール全集 4』蓮實重彦・柴田駿監訳、竹内書房、1970年、p.434。

## **Fascism, Revolution, Line of Escape: At the bottleneck of becoming-revolutionary**

TOMARU Masaki

The purpose of this paper is to analyze fascism in our time and to explore what it is about the movement that allows us to critique it in a practical way. In order to proceed with the above attempt, I first referred to three theorists (Mark Fisher, G. Lukács, and Hidemi Suga). Suga and Fischer analyze the post-1968 political situation as a de-centering of class consciousness, but how can a movement such as that symbolized by Donald Trump be considered within this context? Fisher interprets the Trumpian movement as a deceptive illusion of class consciousness and argues that we need a Lukácsian class consciousness that recognizes things in their wholeness. In a nutshell, he sees that an important truth = class consciousness has been lost as a result of excessive de-centering. It seems to me, however, that there are serious drawbacks to such an idea. When class consciousness is taken as truth and fascism as a matter of deception, the question of choice as to why class consciousness triumphs among multiple wholenesses is no longer asked. But the post-truth of the Trumpian movement, I think, is a matter of multiple wholeness.

From the above problem I referred to Deleuze's interpretation of Nietzsche. This is because his argument seemed to be a question of choice between multiple wholenesses, or in other words, an exploration of the roots of consciousness. However, ontologically interpreting the "will to power" and "eternal recurrence" as a repetitive system of creation can be called permanent revolution, as Shikano Yuji says, but it does not seem to me that fascism can be interpreted there, but not sufficiently criticized. This is because it violently destroys all standards of value. Also, Deleuze's ontological formulation of permanent revolution, as criticized by Masahiro Yamazaki, may lead to a quietism in politics, and at the same time, it may neglect the process or experience that leads to creative consciousness.

After the above discussion, I finally referred to the discussion by Deleuze and Guattari in "A Thousand Plateaus". The reason is that there, it seems to be considered how to draw out revolutionary movements from latent ones, in conjunction with more complex systems. Simply put, I focused on the ambivalence of the concept of 'machine abstraite' and attempted to interpret fascism and revolutionary movements within this ambivalence. I also attempted to link Deleuze-Guattari's argument to the punk rock movement in London and examine what experiences lead to revolutionary movements.